

ひまわりからの メッセージ

137号

2023.3.13

NPO ひまわりの花内

西濃圏域

発達障がい支援センター

発行人: 中野にみ子

パッチワーク



三月も半ばとなり、梅が咲き、今朝はうぐいすの音が聞こえてきています。

この頃になると、私は遠い昔の同級生のことは思い出します。大学時代、福祉の道に進みたいと思って心理学を専攻していたのですが、ある時こう言われたのです。

「君の知識はつぎはぎだらけだよね。一本筋が通ったところもなく、福祉の道に進みたいと言いながら何でも中途半端な気がするんだよね。」

大学卒業後、関西で男性として保育士(保父)第一号になった彼は、私の親友と非常に仲の良い人でしたから、おそらく私の良い加減さが目に余ったのでしょう。ただ、この言葉はすっと心に残っています。それは、私という人間を言い当てていた言葉だと思いかうです。あの時から何十年もの歳

月が経ちましたが、私は今もつぎはぎだらけの知識を駆使して子どもたちやお母さん方、先生方と向き合っています。そんなこの姿に成長してないなあと思いつつ、私ってパッチワークを作ってきたのではないかなあという思いに至っています。

一つの事を深く深く掘り下げていく人もいらっしやるでしょうが、私はつぎはぎだらけの小さな知識をつなぎ合わせて一枚の布にしようとしてきたのではなかったか、そしてそのパッチワークは、まだ沢山の穴があいていて、おそらく一生かかってもその穴を埋めて一枚の布を作り上げることはできないのだろう……と思うのです。

春は春。別れの季節でもあります。幼い頃にかかわった子どもたちが「〇〇大学へ合格しました」「一人暮らしを始めます」「就職します」。等々新しい一歩を踏み出していきます。悩み苦しみながら子育てをして来られた一人ひとりのお母さんたちの顔を思い浮かべ、共に喜びをかみしめながら、いまだ悩みつけておられる方々のことを思っています。でも、身の回りのことを一つ一つ、出来ることから始めていくことが、その人のパッチワークづくりになっていくのではないのでしょうか。

春になると小さな草々が芽生え、花をつけ、それぞれの命を輝かせようとしています。庭先にかがみこんで小さな草花に目をやる一瞬も私の人生にとって必要なことだなあと思う春です。

LD ADHD & ASD

2023年
1月号
より



皆さんは「特別支援教育士」という資格をご存知でしょうか。この資格は国で定められた資格ではなく、LD学会との連携資格で、LD学会の会員であって特別支援教育士(S・E・N・S)資格認定協会によって認められた、いわゆる民間の資格です。「特別支援学級を担当しているわけじゃないし、関係ないわ」と思われる方も多いかもしれませんが、特別支援教育というのは、何も支援学級や支援学校での教育をさすものではなく、全その子どもたちを対象とした教育ですから、教育にたずさわっている人全てに関係があります。

さて、このSEN・Sの会では、「LD・ADHD&ASD」という冊子を発行していて、発達障がい児だけでなく、学習に困りのある子どもたちへの様々なアプローチ法が記されていて参考になります。

私たちの教え方で学べない子には

その子の学び方で教えよう(上野一彦)

裏表紙には
上記のことは
書かれています。

LDの子どもたちが困りをもつこととして「聞く、話す、読む、書く、計算する、推論する」の六つがあげられています。保護者の方の

お話を聞いてみると、「漢字が書けない」、「表現が苦手」などの中に「算数が苦手」という方も多くおられます。

算数に関することは、六つのうちの「計算する」と「推論する」の二つです。「推論する」は文章問題だと考えて下さい。

さて、今回は算数が苦手なお子さんについて、前述の冊子も参考にしながら考えてみようと思います。

私たちが目で見てパツといくつあるかが分かるのは、三つか四つまでだと考えられています。そして「いち、に、さん」とカウンティングして数えていきます。私はカウンティングには入浴時の利用を勧めています。湯船に浸る出るときに指を出しながら今まで数えて出ることです。幼児は指を上手に分離させることはできませんが、それでも毎日、お風呂に入ってお母さんと一緒に数えて出るときを繰り返す中で数を身近に感じていきます。もう一つ、幼児期には、遊びをくり返したい時に、指を一本立てて「もう一回」という要求の出し方を促しています。その他にも幼児期から数に慣れていくことは、生活の中でたくさん経験していくことができると思います。最近、検査をしていて誕生日や年齢をたずねても答えられない子に出会います。知的な遅れがないのに年長児になっても言えない子がいて、びっくりさせられます。ゲームやスマホに興じていても日常生活の中で数に親しむことが少ないのかもしれませんが。

小学生になって私が気になる子たちと言えは、計算は

できるけれど、文章問題ができない子どもたちです。文章問題を解くためには、いくつかのプロセスが考えられます。

① 問題文が読める。

② 読んだ文章の内容がイメージできる。

③ そのイメージに沿って、演算方法（たし算か引き算か、かけ算か割り算かなど）が決められる。

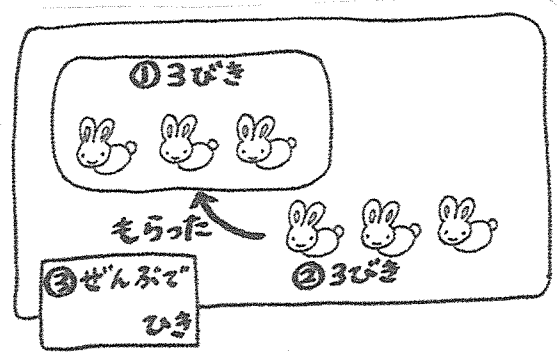
④ 演算方法に沿って正確に計算することができる。

⑤ 出した解答が問題の意図に照らし合わせて適切かどうか判断する。

実は、このプロセスの中のどこでつまづいているのかが明らかになれば、そのプロセスに沿った指導が必要になります。つまり、そこを見つけて出さなければなりません。①に問題がある場合には算数以前の言語理解でつまづいています。文の読みとりや指示理解の弱さもあります。語い数を増やしたり、文字の読み書きの力をつけることが先決でしょう。

②のイメージ化ができない子どもたちは意外に多いと思います。WISCの検査で言語的推理の弱さを指摘されるのですが、お母さんたちの中には「エッ？何のことかなあ」と思われることも多いでしょう。イメージ化できない子には絵を書いてイメージ化していくことを勧めますが、子ども自身も絵を書くことが難しく、指導が進まないことがよくあります。家

庭学習では、お母さんが絵を書いてイメージ化することはできませんが、それでは本人の力にならないうえです。日文章題イメージトレーニングワークシートB（かもがわ出版）を出版された山田亮先生は、問題を絵で作成し、それを文章題にする取り組みを考案されています。



- ① うさぎが 3びきいます。
- ② 3びき ちらってきました。
- ③ ぜんぶで なんびきでしょう。

絵から文章にしていく問題をやった後に、今度は同じパターンで文から絵を描いていきます。そして描いた後に立式し解答します。次に演算のパターンを変えて、絵から文、文から絵と、五問おつや。ていく中で絵と文のつながりをたくさん経験して

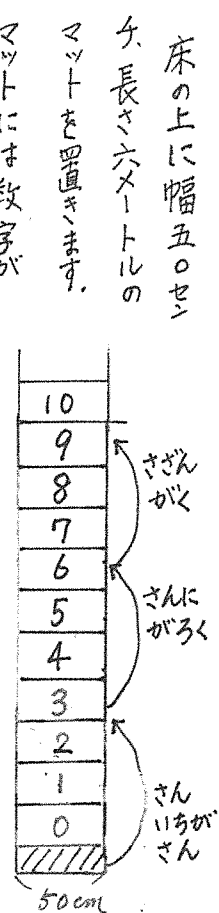
イメージ化のトレーニングをしていこうという試みです。絵を文章にするという試みは国語の読解課題にも使うことができます。ただ著者も書いておられますが、この方法を使えばすぐにできるようになるというものではないと思います。

最近の子育てでは、昔のように寝る前に本の読み聞かせをすることは始まらないようです。本来は脳の発達のために九時間睡眠

が必要にもかかわらず、床に入る直前までスマホやゲームをやっている子どもたちが大勢います。子どもの育つ環境そのものが、こはからイメージ化していく環境にはなっていないように思います。

算数の文章理解も国語の長文理解も、作文も、実は根っこは同じだと思っております。日々の生活の中で子どもたちと交わすこととはどの位あるでしょうか。忙しい大人が子どもたちの話をじっくり聞くということも、キッと少なくなっているのでしょうか。

さて、もう一つ、九九の覚え方について「ジャンプでかけ算九九」という発表が掲載されてきました。普通、九九を覚えるには、唱えて覚える方法がとられていますが、なかなか覚えられない子もいます。覚えなくても、しばらくすると忘れてしまうこともあります。そこで子どもたちにわかりやすく楽しく学ぶことができないかと考えて実践されたのがジャンプでかけ算という方法でした。



書かれています。その数字を見て、かけ算を唱えながらジャンプしていくというものです。つまり、視覚と動作と聴覚を使って覚えていくわけです。ちょうど国語の特殊音節をMIMで学んだ時のように、体を動かすことによってより覚えやすく工夫され

たといえるでしょう。数字上をジャンプして進むという方法は右脳と左脳を同時に動かすことができる方法で、かけ算の九九だけでなく、たし算でも応用できます。

これに使うマットは手に入りにくいので、著者は数字カードをラミネートして養生テープで廊下にはりつけて使っているとのことでした。

「LD・ADHD & ASD」は毎号いろいろな特集を組んでいて、全国で様々な試みがあることを知らされます。学校現場では、子どもたちのためにどの様な教え方が学びの意欲につながるのかと実践を重ねていらっしゃる先生方が多いのだなあと感じますし、一人でも多くの子どもたちが学ぶ楽しさを知ってほしいと思います。苦手意識をもってしまうと、なかなか「やってみよう」という意欲は出てきません。学校でも家庭でもそこが課題です。もしかしたら大人側の意識変革が必要なのかもしれませんね!!

お知らせ

- 10日 センター親の会
- 5日 ピアサポート
- 22日 不登校・いきいきもり家族会

<本の紹介>
『7つの習慣』
自分を変えるレッスン
日本図書センター

